

教員長期社会体験研修報告【株式会社アドバコム】

札幌市立平岡公園小学校 宇賀神 智哉

1 研修の目的

教職員として15年間、たくさん子どもたち、保護者、教職員仲間と関わり、様々な経験をしてきた。しかし、6年生を担当し、総合的な学習の時間にお招きした方々、プライベート仲間など、教職員以外の方々と関わる中で、世間の考え方と自分の考え方のずれに気付いたり、自分の無知さを実感したりすることが多くあり、まだまだ学ばなければならないと思うようになった。

また、業務のICT化、働き方改革など、学校現場は変化のときを迎えている。さらに、新型コロナウイルス感染症の流行により、学校現場のアップデートは急務となった。企業で働くことで、新たなテクノロジーの生かし方、組織の運営方法などを学べるのではないかと考えた。

そして、教職員以外の仕事をしている方々とたくさん関わることで、子どもたちが身に付けるべき、社会に出て本当に必要な力とは何なのかを知ることができるのではないかと考えた。

「自分自身が成長すること」、「学校をアップデートするためのヒントを見つけること」、「子どもたちに身に付けさせるべき力を知ること」の3つを今回の研修の目的とした。

2 主な研修内容 <配属部署> エコチル編集部/札幌

■株式会社アドバコムについて

株式会社アドバコムは、環境教育情報紙「エコチル」の発行や、広告代理業を行っている会社である。

「エコチル」は学校で毎月無料配布され、子どもたちにエコに関する最新の情報などを伝えている。北海道全域、東京、横浜の小学校、札幌市内の中学校・市立高校で配布されている。「コミュニケーションビジネスで社会課題解決に貢献し、人々の幸せを実現する会社を目指す」ことを経営理念としている。

社内では、個人の席を持たず自由に働く席を選択できるフリーアドレス制を採用している。仕事に合わせて好きな場所で作業ができるので、他部署の社員ともコミュニケーションを取りやすいというメリットがある。荷物を置いたままにできないので、自然と整理整頓を意識するようになった。

また、当社では、チャット、メール、カレンダー、ファイル管理などを1つのアプリで完結できるコミュニケーションツールを有効活用している。このアプリを使用することで、迅速に情報を共有ができ、会議を最小限に抑えることができている。

【エコチル編集作業】

○校正作業

校正とは、記事の字句や内容、色合いなどに誤りがないかを確認する作業である。より正確でわかりやすい情報を発信するために、欠かせない作業である。そのため、エコチルが完成するまでに、社員全員で何度も校正を行っている。この校正作業は日常的に行ってきた。

○記事制作

年間を通して、「レッツトライエコライフ」という学校でのエコ活動を校長先生に紹介していただく記事を担当した。電話で原稿を依頼し、届いた原稿を校正し、外部のデザイナーに制作を依頼する。出来上がった記事を執筆した校長先生に確認してもらう。問題がなければ校了といった手順だ。北海道内の小学校、札幌市内の中学校、横浜市内の小学校の3校分を毎月作成した。メールを送信するときにはccを付けて編集部の方々と情報を共有し、進捗状況、記事の内容などを確認できるようにした。

他にも、「エコワードパズル」、開催されたイベントについて報告する「開催報告」、エコな活動をしている人物を紹介する「エコなひと」なども担当した。また、Webマガジンの記事作成も担当した。

【新しい生活様式の合言葉「あいてますか」】

新型コロナウイルス感染症の影響で学校が休校となっている間に、何か学校のためにできることはないかと考えた。SNS 上で、新しい生活様式を覚えるための合言葉「あいてますか」というものを目にし、これを広めようと考えた。考案者に連絡を取ったところ、社内でもデザインすることを了承して下さった。エコチルのホームページに掲載してダウンロードできるようにしたところ、大変好評で、瞬間に広がっていった。新聞やテレビなどのメディアからも取材を受け、取り上げていただいた。その後、ポスターを作って札幌市内の小学校・児童会館に配布し、さらに、エコチルに見開き2ページで掲載することになった。これらのことを実現するためには協賛が必要になり、企業への営業を行ったところ、15社が協賛して下さることになった。たくさんの小学校でポスターを貼っていただき、子どもたちに新しい生活様式を定着させるのに役立つことができたと感じている。



▲「あいてますか」ポスター

【キャリアルアカデミー～中学生による本田圭佑さんへの取材】

キャリアルアカデミーという「社会で即戦力として活躍できる人材の輩出を目指すプロジェクト」を担当することになった。その第1弾として、エコチル9月号中高生版で、中学生に記事を書いてもらうことになった。内容は「一人の人物を取材し、その方の考え方や生き方を伝える記事」とした。中学生たちの希望でプロサッカー選手の本田圭佑さんに取材を依頼したところ、中学生たちの熱意が伝わり、本田さん本人へのオンライン取材が実現した。“常に前向きに考えるコツ”、“夢が叶わないかもしれないと感じていても夢を追い続けるべきか”、“やる気になれないときの気持ちの切り替え方”など、中学生ならではの悩みを相談する形の取材となった。このときの様子はYouTubeでも公開されている。取材したことをもとに中学生たちに原稿を作成してもらい、エコチル中高生版に掲載した。中学生に貴重な経験をさせて成長を促しつつ、記事を制作していくという新しいスタイルの編集作業となった。その後、高校の活動紹介、元日本ハムファイターズの田中賢介さんへのインタビューなど、中高生が興味を持ちそうなことを題材に、継続して記事制作を行った。

【北海道レジ袋チャレンジ】

北海道環境生活部環境局とエコチルの協働で「プラスチックごみ排出抑制」のキャンペーンを行うことになった。“日頃からエコバッグを持ち歩き、レジ袋をもらわないようにする”というライフスタイルを根付かせるためにはどうすればよいか話し合い、「北海道レジ袋チャレンジ」を企画した。エコチルにカレンダー式ワークシートを掲載し、“1日1枚もレジ袋をもらわなかったらキャラクターに色を塗る。家族全員で取り組み、7日間連続で達成したらプレゼント応募をすることができる”というルールとし、子どもたちが楽しく取り組めるようにした。鈴木直道知事からメッセージをいただいたり、企業に協賛していただいたりし、行政・企業・学校を巻き込んだ企画となった。



▲北海道レジ袋チャレンジ

キャンペーン目標は「1週間、レジ袋を使わない人を6割にすること（3月時点で3割）」だったが、11月末時点の調査で71.9%（環境省調べ）となり、目標を達成することができた。また、北海道環境生活部環境局がレジ袋チャレンジ優秀サポーター「普及啓発部門・優秀賞」に選出され、環境省から表彰された。道民のエコ意識の向上につながったと感じている。

【環境広場さっぽろ 2020 バーチャルツアー】

2021年1月に、「環境広場さっぽろ 2020 バーチャルツアー」が開催された。毎年、札幌市と協働で開催されていたが、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、バーチャル開催となった。バーチャル空間に



▲バーチャル動物園

バーチャル札幌ドームを創り、会場とした。環境・SDGsZONE、キャリア教育ZONE、スポーツZONE、フードZONEがあり、出展している企業のブースに入ると、画像、動画などを見ることができ、ライブ配信ステージでは、著名人のトークショーやパフォーマンスが行われた。子どもたちが自宅にいながら、楽しんだり、学んだりできるという、時代に合ったバーチャルイベントを目指していった。

私は、バーチャル動物園などを担当した。出展交渉、展開イメージの提案、画像・動画素材集め、バーチャル空間制作会社への制作依頼などを行った。バーチャル動物園は、各動物園から1頭ずつ代表の動物を展示していただき、紹介文、写真、動画を展示していくという企画だ。初めてのバーチャルイベントのためイメージを伝えるのが難しく、出展交渉は難航したが、円山動物園、上野動物園など、11園に参加していただいた。各動物園がSNSでも拡散してくださり、たくさんの方に楽しんでいただいた。

環境広場には、およそ20,000件のアクセスがあった。コロナ禍を理由にイベントの開催を諦めるのではなく、別の形を模索して、時代に合わせたチャレンジをしていくことの大切さを実感した。今回のようなバーチャルイベントは、今後、需要が高まり、さらに発展していくように感じている。

3 研修の成果

コミュニケーションビジネス

この1年間で、たくさんプロジェクトに携わらせていただいた。上記プロジェクト以外にも「YouTuber×企業局コラボ動画制作」、「スポチル～ウィンタースポーツ特集～」など、たくさんプロジェクトを任された。過去に行ったことのない新規プロジェクトも多く、見通しがもてなかったり、大きなお金が動いているから失敗できないというプレッシャーがあったりと、スタート時は毎回不安があった。しかし、社内の方々やプロジェクトパートナーである外部の方からアドバイスをいただき、最適解を模索しながら、目標に向かって突き進むことができた。職種、立場が異なる方からのアドバイスは、自分では思いつかないようなアイデアが多く、とても刺激になった。人と人とのつながりの大切さを実感した。アドバコムを経営理念でもある「コミュニケーションビジネス」というものを体験できたと思っている。

スピード感のある仕事の仕方

この一連のプロジェクトでは、入念に計画を立ててからスタートするのではなく、目標を決めたらとりあえず動き出し、方向性を探りながら進めていくという取り組み方が多かった。この取り組み方は、瞬間的な判断力が求められる難しさがあったが、圧倒的にスピード感があった。新しいことにチャレンジするとき、「不安はあるが、まずはやってみよう」と、勇気を持って行動することの大切さ、楽しさを知ることができた。これは、子どもたちにも伝えたいことだと感じている。

ICTに関するスキルアップ

エコチルWEBマガジンの記事作成・公開も担当し、ホームページ上の情報を更新できるようになった。また、動画編集を任されることも多くあり、複数の動画の結合、部分削除、テロップ追加、BGM挿入など、基本的な操作ができるようになった。さらに、動画をYouTubeに公開する方法も覚えた。このような作業は初心者でもできるようにシステムが工夫されていて、やってみると意外と簡単にできてしまうことが多かった。初めてのことで「難しそう…」と思いこまずにやってみることが大切だと感じた。

4 研修の課題

学校のアップデート

PC、スマートフォンなどのアプリやソフトは、大枠が出来上がった段階でリリースしている。不具合が見つかったらアップデートをし、顧客の要望に合った快適な状態に近付けていっている。企業にも様々な要望が届く。世間に求められていることをキャッチし、事業展開方法を工夫したり、新規事業を立ち上げたりしながらアップデートしている。過去の実績にとらわれず、時代に合わせた変化が必要なときは積極的に新しいことにチャレンジしていた。

学校現場はどうか。私の経験では、授業・行事・校務等において「昨年通り」としてしまうことが多かった。その方が仕事を減らせたり、教師も子どもも慣れていて活動しやすかったりと、メリットが多いように感じていた。しかし、時代に合ったシステムになっているか、もっと効率的・効果的な活動にできないかということを考え、攻めの姿勢でアップデートしていく必要があると感じるようになった。

学校現場でのICTの活用

民間企業では、「オンライン会議システム」の利用は日常化している。学校現場でも、他校との情報共有、ゲストティーチャーの講話、研究授業の助言、仕事が忙しい保護者との懇談、不登校児童のケアなど、利用できる場面はたくさんある。このような新しい取り組みの成功例を共有し合い、取り入れていくことで仕事の効率化が実現できるように感じている。

また、今の時代、どのような職業に就いてもPCを使いこなせることは絶対条件だ。子どもたちには、情報活用力を身に付けさせていかなければならない。分からない言葉を検索する、調べたことをレポートにまとめる、自分の考えをプレゼンソフトでまとめ、発表するなど、積極的にPCに触れさせていくべきである。かつて、子どもにPCを使わせたとき「1時間かけても調べたいことが見つからない」、「ローマ字打ちに時間がかかる」、「関係ない動画を見始める」ということを理由に、PCの使用を避けてしまうことがあった。しかし、PCに触れさせないことは時代に合った教育とは呼べない。情報活用力、情報の取捨選択、情報リテラシーについて学ばせながら、PC活用を日常化していくべきであると感じている。

5 研修の感想

ワークシェアの推進、情報の共有化

この1年間で様々な職種の方々と関わり、それぞれが役割を明確に分けて働いているということを感じた。エコチル制作であれば、編集、営業、デザイン、事務管理、それぞれが専門的な知識・技術を持ち、その力を信頼し合い、迅速に情報を共有していくことで効率的・効果的な仕事が成り立っている。

一方、教員は一人一人の仕事が多岐にわたっている。まもなく導入される教科担任制を生かし、ワークシェアを推進し、授業の質の向上、教材研究の時間短縮などを実現できるような工夫が必要だと感じている。また、校務支援システムを有効に活用し、スムーズな情報共有を意識していきたい。

「教員（公務員）」と「民間企業」の違い

エコチルは、子どもたちに環境についての情報を提供する「社会貢献活動」をメインとしている。この活動を続けるためには当然「お金」が必要となる。その「お金」は、エコチルを応援してくださっている企業の広告費で賄っている。「社会貢献活動」と「お金」の両輪が揃わないとこの事業は成り立たない。「お金」を稼ぎ続けなければならないのである。一方、教員は、子どもたちへの教育活動を行うことが中心で、「お金」は行政からの予算で賄っているため、「稼がなくてはならない」という感覚がない。このお金に関する考え方が教員（公務員）と民間企業の大きな違いであると感じた。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で苦しんでいる業界も多く、企業の存続をかけて試行錯誤している企業を目

にしてきたので、危機感の違いを感じた。教員（公務員）は終身雇用で身分保障されているため、このような危機感を実感しづらい部分がある。このことを自覚しておく必要があると感じた。

学校と民間の連携

北海道庁や札幌市との協働プロジェクトに何度も参加し、目標を達成するための企画アイデアを提案したり、広報のお手伝いをしたりしてきた。行政の苦手な分野を民間企業が補っていくという、このような官民連携は日常的に行われている。

学校も民間企業と連携した取り組みが可能はずである。様々な企業の方とお会いしたときに私が小学校教員であることを伝えると、多くの方が興味を持ってくださった。子どもたちの成長を望み、楽しく学べるイベントを開催していることや、学校に行って子どもたちと関わり合いたいというお話をたくさんいただいた。たくさんの方が子どもたちの教育に関わりたいと考えているということを知った。最近では、オンライン会議システムを利用した出前授業など、比較的簡単に依頼ができるので、積極的に活用し、様々な職種の方の生の声を子どもたちに聞かせてあげたい。

研修を終えて

大学卒業以降、ずっと教員だけをしてきた自分にとって、民間企業で経験したことすべてが新鮮であり、たくさん刺激を受けた。新しい価値観を得て、視野が広がったと感じている。本当に貴重な1年だった。アドバコム社員をはじめ、たくさんの方との出会いに感謝している。

今回の研修で学んだことを学校現場、子どもたちに還元していきたい。